

の関係および各植生型における落葉・落果量について調べた。

II 調査地と調査方法

調査地は志賀高原西館山北斜面からクロフノ沢・横湯川本流・竜王沢で囲まれた金倉林道下の地域である。標高は1050mから1650mの範囲にあり、現在も地すべりが頻発し緩斜地と急斜地、尾根と沢が連続するところである。調査地を踏査し林冠の種組成を相観でもとめて植生型の分布を決定した。1×1mの方形リタートラップをブナ林に23個、ミズナラ林に13個、湿性林に24個設置して落葉・落果量を測定した。

III 調査結果および考察

調査総面積(406 ha)中、ブナ林(131 ha)、ミズナラおよびカンバ林(214 ha)、ヤマハンノキ林(45 ha)、その他(16 ha)の植生型がみられた。ブナ林は標高1250m以上の尾根地形で傾斜が急な斜面に分布している。ブナは小径のものが多く、カンバ林は標高1500mを境に上部ではダケカンバが、下部ではシラカンバの混交歩合が大きい。シラカンバ林は地すべりに由来するテラス状の緩斜地を占めている。ミズナラ林も緩斜地に分布するが、斜面下部に多くみられる。カンバ林、ミズナラ林ともに一斉林的な林分構造をもつ。ヤマハンノキ林は斜面下部の沢近くの湿性な場所に分布していた。湿性な場所をトチノキ、サワグルミ、ミズキ、ヤナギ類が占める場所もある。当地の植生型のほとんどは林分構造と樹種組成から二次林とみなされる。地形の多様さと森林利用の結果、植性のモザイク的構造が形成されたものと考えられる。

1980年8月から11月に至る期間での通称水道二又のブナ林の落葉量(乾重)は1800kg/ha、落果量(殻斗等を含む)は30kg/haであった。同期間のミズナラ林(地獄谷右岸)の落葉量は2100kg/ha、落果量は70kg/haであった。通称オカメノ平にあるミズキが優占する湿性林の落葉量は1900kg/haから3000kg/ha、落果量は20kg/haから190kg/haであった。いずれの林でも落葉落果量のピークは10月にあった。また今年度の落下量はいずれの林の場合も前年度の落果量の $\frac{1}{5}$ に満たないことや観察の結果からみて、今年度は調査地における結実量が比較的少ない年度であったと考えられる。

房総半島におけるニホンザルの分布現状とその構造

岩野 泰三(東大・理)
(財)日本野生生物研究センター

筆者は房総半島におけるニホンザルの分布の現状を把握し、群れの分布域とハナレザルの出現域の空間的構造、群れの分布域の時間的变化およびその地域の環境上の特徴を明らかにすることを目的として、1978、79、80年にわたって調査を行った。

調査地域は、房総半島中、南部の7市10カ町村およそ1294km²であり、聞きとり地点は195地点(群れ分布情報69地点、ハナレザル出現情報81地点)である。調査は、主として従来から確認されていた群れの分布域の外縁に沿って行われた。新たに確認された群れの分布地点は35地点、このうち明らかに分布域の外縁が拡大した地点は15地点である。拡大した距離は、最近7年間に最大4km、平均2.1km(0.3km/年)である。

ハナレザルの出現情報の79.1%が群れ分布域から15km以内で得られた(ハナレザルが群れ生息域から最も遠い地点で見られたのは千倉町で、距離は23.2kmである)。

調査地域を基準地域メッシュ(0.9km²)に分割し、群れ分布域の環境上の特徴を解析し、以下の結果を得た。

群れ分布域は284区画約255.6km²である。この地域の道路密度は1区画あたり0.41であり、他地域の半分以下の値である。また、この地域では、市街地や耕作地の割合が他地域に比較して低く(市街地3.17%、耕作地52.82%)、自然および代償植生は他地域に比較して高い(94.01%)。

ヤクザル地域個体群における分裂群の遊動域の形成機序とその要因の分析

丸橋 珠樹(京大・霊長研)
山極 寿一(京大・理)

筆者らは、屋久島国割岳西斜面において、照葉樹林を生息環境とする野生ニホンザルの自然社会の研究を、1975年以来、継続しておこなってきた。1976年に、丸橋によって餌を媒介とせず habituation されたK_o群は、1976年の交尾期から1978年